今月の野菜

トマトのあれこれ

野菜品目の中で産出額ナンバー1　人気のトマト

調査情報部



ファーストトマト

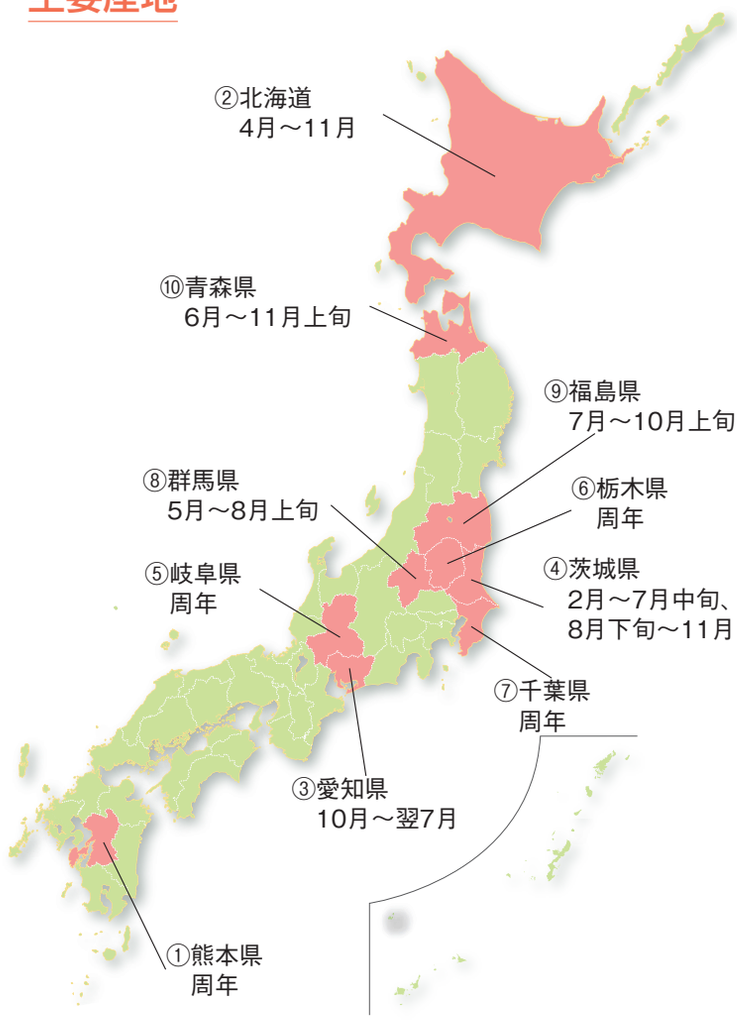


桃太郎



カラフルなミニトマト

主要産地



資料：農林水産省「令和７年産野菜生産出荷統計」
注：図中の番号は収穫量の多い順番、期間は主な出荷期間を表している。

トマトは、ナス科の野菜で、原産地はメキシコから南米アンデス一帯、ガラパゴス諸島であり、現在でもこのエリアでは野生種が自生している。日本には18世紀、江戸時代に「唐柿（とうし）」「唐なすび」の名で渡来した記録が残っているが、当時は観賞用で、一般的に食されるようになったのは20世紀以降、米国の品種が導入されてからである。

栽培品種は生食用と加工用に大別され、栽培方法も異なる。日本では生食用として先のとがった形が特徴的なファーストトマトと丸くて日持のよい桃太郎系が古くから栽培されてきた。現在では、100グラム以上の大玉、30～60グラム程度の中玉、10～30グラム程度のミニに加えて原種に近い極小のマイクロトマトなども市場に出回っている。また、緑、黄色、オレンジなどのカラフルなものや房付きなどがあり、バラエティに富んだ野菜である。

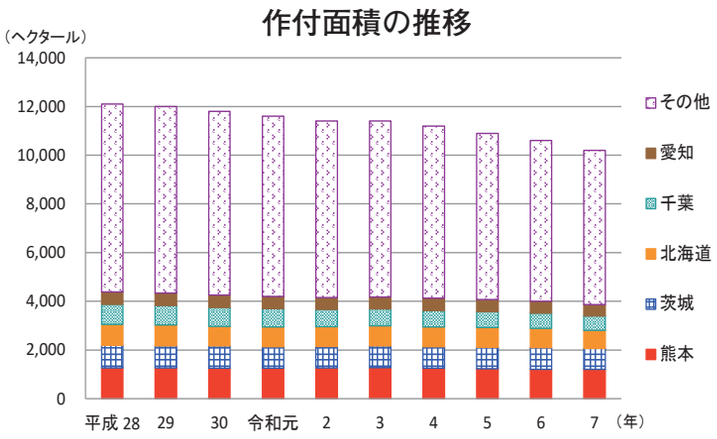
作付面積・出荷量・単収の推移

令和７年の作付面積は、１万200ヘクタール（前年比96.2%）と、前年に比べてやや減少した。

上位５道県では、

- 熊本県 1200ヘクタール（同　99.2%）
- 茨城県　865ヘクタール（同　96.8%）
- 北海道　747ヘクタール（同　95.6%）
- 千葉県　581ヘクタール（同　91.5%）
- 愛知県　465ヘクタール（同　97.5%）

となっている。



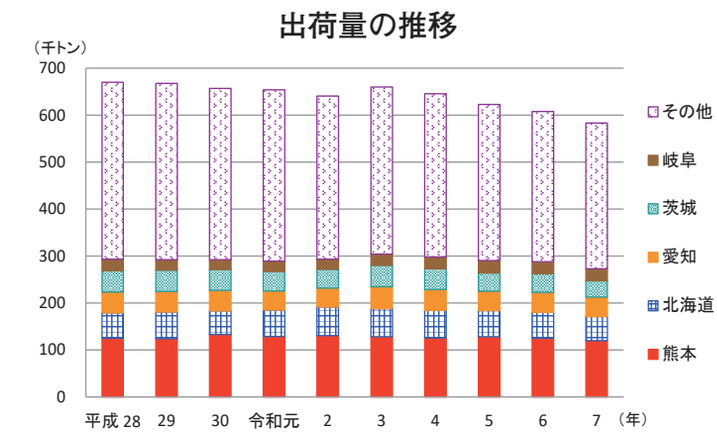
資料：農林水産省「令和７年産野菜生産出荷統計」

令和７年の出荷量は、58万3000トン（前年比95.9%）と、前年に比べてやや減少した。

上位５道県では、

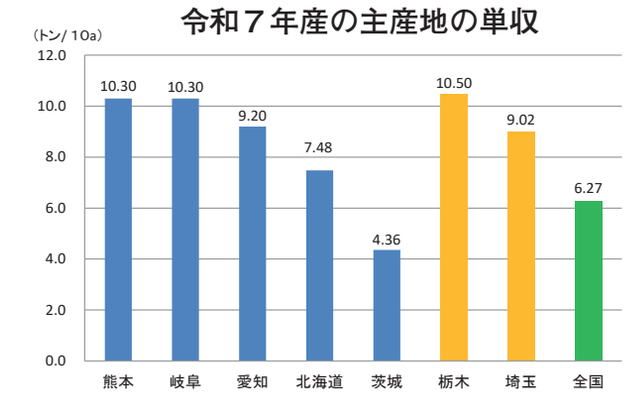
- 熊本県　11万9600トン（同　95.7%）
- 北海道　 5万1900トン（同　93.5%）
- 愛知県　 4万 900トン（同　96.2%）
- 茨城県　 3万5000トン（同　88.6%）
- 岐阜県　 2万5600トン（同 100.4%）

となっている。



資料：農林水産省「令和７年産野菜生産出荷統計」

出荷量上位５道県について、10アール当たりの収量を見ると、熊本県と岐阜県の10.30トンが最も多く、次いで愛知県の9.20トン、北海道の7.48トンと続いている。その他の県で多いのは、栃木県の10.50トン、埼玉県の9.02トンであり、全国平均は6.27トンとなっている。



資料：農林水産省「令和７年産野菜生産出荷統計」
注：黄色は出荷量上位５道県以外で単収が多い2県、緑は全国平均。

作付けされている主な品種等

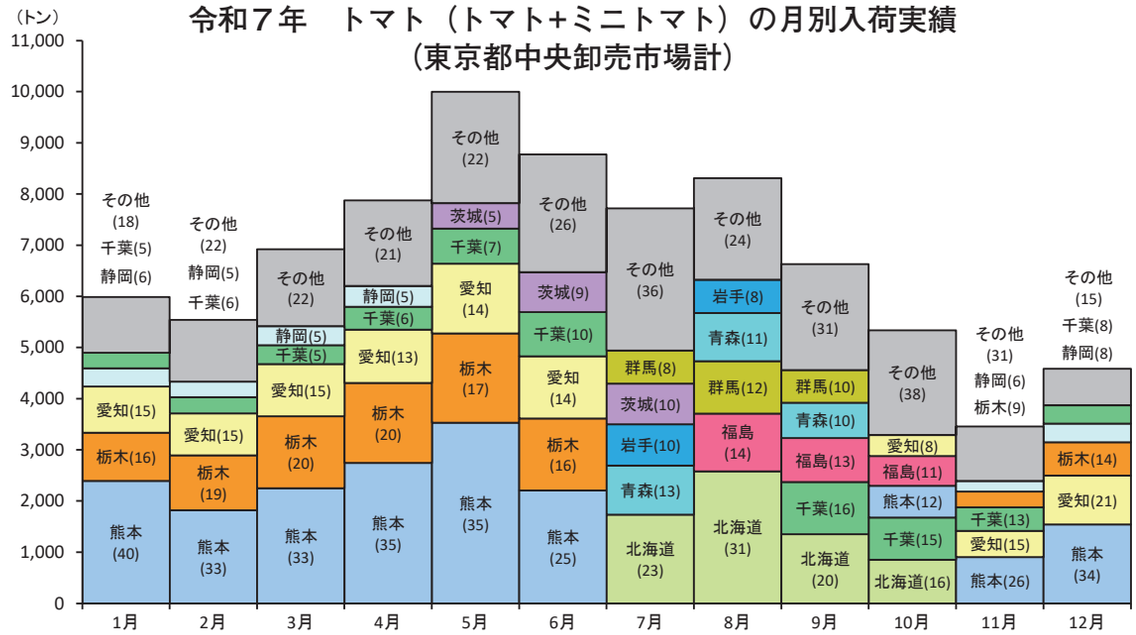
トマトは、大きさ（大玉、中玉、ミニ）と色（桃、赤、その他）により大別される。大玉では、「桃太郎」や「りんか409」などが代表的である。「桃太郎」は、昭和60年に発売され、完熟後であっても、輸送に耐えられるよう、果肉がほどよい硬さに開発された品種である。輸送時に果肉が傷まないよう、未熟の青いトマトが出荷されていた当時としては、画期的であった。ミニでは、「千果」や「アイコ」などが代表的である。桃色系トマトは、甘みに富み、酸味が少なく、生食用に多く利用されている一方、赤色系トマトは、酸味と甘味が強く、ジュースや缶詰などの加工用として多く利用されている。

都道府県名	主な品種
熊本県	（大玉）かれん、TY プリマドンナ、桃太郎ブライト、麗妃、アニモ TY-12 （ミニ）小鈴キング、千果
茨城県	（大玉）アニモ TY-12、TY 夏和恋、麗夏 （ミニ）サンチェリーピュア、サンチェリーピュアプラス、TY 千果
北海道	（大玉）桃太郎ネクスト、れおん、りんか 409 （中玉）シンディースイート、ラウンド （ミニ）キャロル 10、アイコ
千葉県	（大玉）桃太郎系、かれん （ミニ）TY 千果、TY 花鳥風月、ロイヤルパッション
愛知県	（大玉）かれん、麗旬、桃太郎系 （中玉）シンディスイート （ミニ）千果、小鈴、アイコ

資料：関係者聞き取りにより農畜産業振興機構作成

東京都・大阪中央卸売市場における月別県別入荷実績

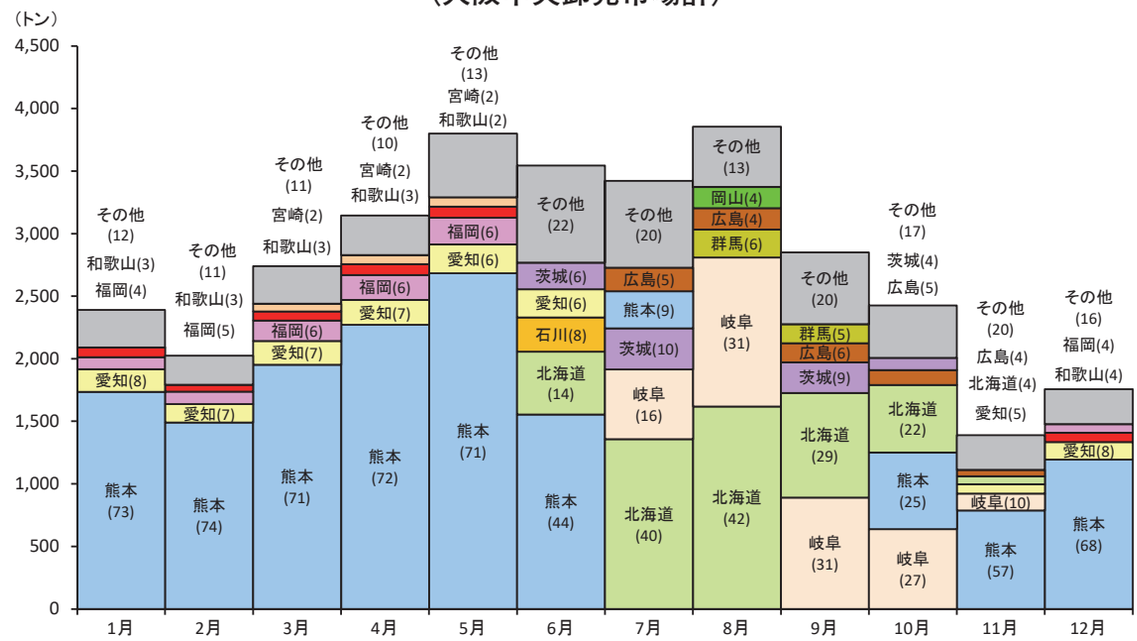
東京都中央卸売市場の月別入荷実績（令和７年）を見ると、５月が最も多く、11月が最も少ない。１～６月と11～12月は、熊本、栃木、愛知などからの入荷が多く、いずれの月も三つの産地で入荷量全体の半分以上を占めている。７～９月は、北海道のほか、青森、岩手、福島といった東北地方からの入荷が多い。10月は、産地の切り替わり時期であり、北海道や千葉、熊本、福島、愛知などからの入荷がある。



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：令和７年東京都中央卸売市場年報）
注：（ ）内の数値は、月別入荷量全体に占める割合（%）である。

大阪中央卸売市場の月別入荷実績（令和７年）を見ると、５月と８月が多く、11月が最も少ない。１～５月は、熊本からの入荷が７割以上を占める。６月からは北海道からの入荷が始まり、７～10月は、北海道と岐阜からの入荷が多い。10月から再び熊本からの入荷が始まり、11～12月にかけ入荷が増えていく。

令和７年　トマト（トマト+ミニトマト）の月別入荷実績
（大阪中央卸売市場計）

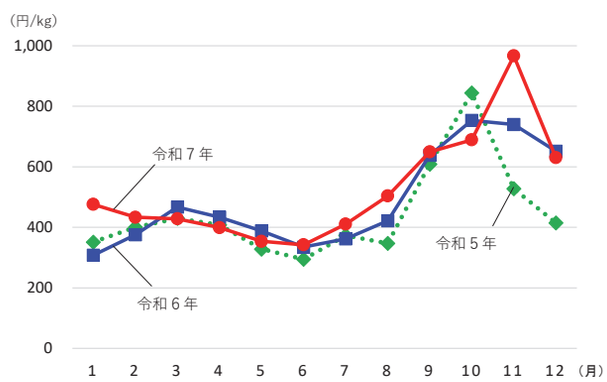


資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：令和７年大阪市・大阪府中央卸売市場年報）
注：（ ）内の数値は、月別入荷量全体に占める割合（%）である。

東京都中央卸売市場における価格の推移

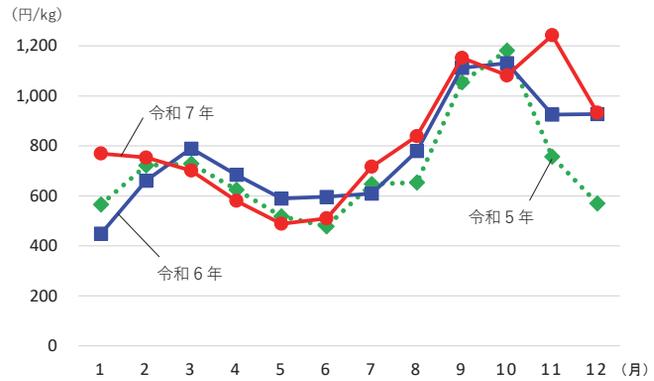
東京都中央卸売市場における令和７年の国内産トマトの価格は、１キログラム当たり343～967円（年平均483円）、国内産ミニトマトは488～1243円（年平均776円）の幅で推移した。価格は春先から夏にかけて下落し、年末にかけて上昇する傾向にある。

トマト　卸売価格の月別推移（国内産）



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：東京都中央卸売市場「市場月報」）

ミニトマト　卸売価格の月別推移（国内産）



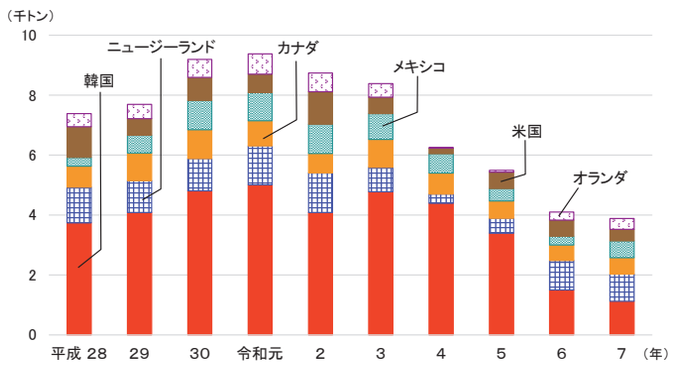
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：東京都中央卸売市場「市場月報」）

輸入量の動向

トマト（生鮮）の輸入量は、平成28年から令和元年は増加傾向で推移し、元年は9378トンであった。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が拡大し始めた２年以降、減少傾向で推移しており、７年は3886トンで元年の４割程度となった。この減少の背景には、４年の春頃から円安が急速に進んだことも一因と考えられる。輸入先は、韓国、ニュージーランド、カナダ、メキシコ、米国、オランダなどと幅広い。韓国は、４年以降減少傾向で推移し、７年は４年に比べて５割以上シェアを落としている。

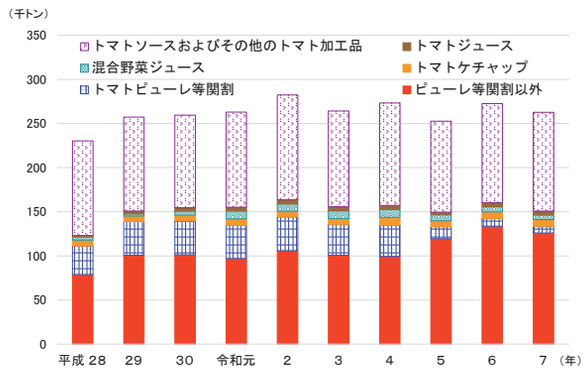
トマト（加工品）の輸入量は、直近10年間はほぼ横ばいで推移しており、７年は26万2629トンでピューレ等関割以外が最も多く、次いでトマトソースおよびその他のトマト加工品となった。

トマト　国・地域別輸入量の推移（生鮮）



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

トマト　国・地域別輸入量の推移（加工品）

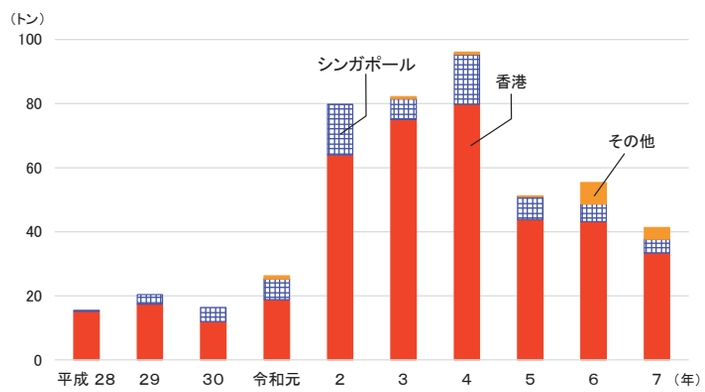


資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

輸出量の動向

トマト（生鮮）の輸出量は、直近３年間は40～50トン前後で推移しており、令和７年は41.3トン（前年比74.6%）と前年から大幅に減少した。直近３年間の輸出先は、香港が８割程度を占めており、次いでシンガポールとなった。

トマト　国・地域別輸出量の推移（生鮮）



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

消費動向など

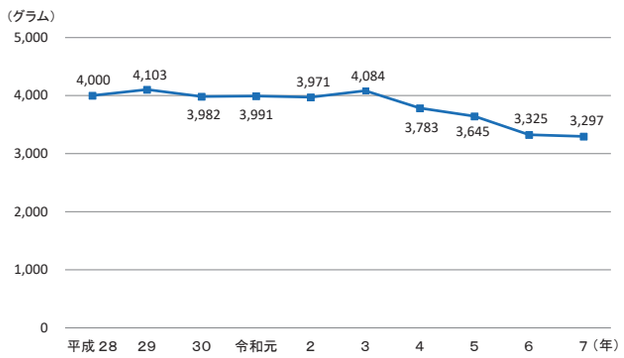
トマトの生産規模を見ると、国内の野菜産出額の中で最大の2442億（令和６年生産農業所得統計）となっており、指定産地数は夏秋で69、冬春で58（令和８年８月現在）と、指定野菜15品目の中で最多である。

一方、トマト（生鮮）の１人当たり年間購入数量は、令和３年までは４キログラム程度であったが、４年以降は減少傾向で推移している。小売価格は、４年以降、上昇しており、７年は１キログラム当たり974円と平成28年の1.3倍となった。小売価格の上昇に伴い購入数量が減っていることが読みとれる。

トマトに含まれる赤色成分のリコピンには、抗酸化作用があることから、がんや動脈硬化などの生活習慣病を予防する効果が期待される。リコピンは熱に強く、ケチャップやトマトジュースなどの加工品にしても、効果を損なうことがない。また、うま味成分であるグルタミン酸も豊富に含まれることからだしとして料理のベースに使われることもある。

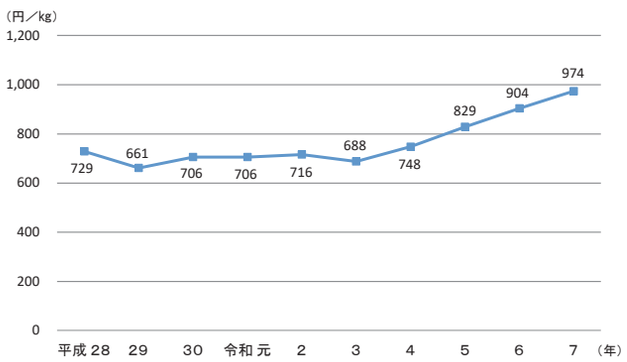
トマトを丸ごと使ったレシピを以下に紹介するので、ぜひお試しいただきたい。

１人当たり年間購入数量の推移



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」、（原資料：総務省「家計調査年報」）

（参考）　小売価格（東京都区部）の動向



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」、（原資料：総務省「小売物価統計調査」）

○トマトのおすすめレシピ○

トマトの丸ごと炊き込みご飯



URL:https://www.alic.go.jp/y-kanri/yagyomu03_000001_00179.html